
集団における絵本の読み語りに関する一考察

読み語り場面の観察記録からの考察

齋藤 めぐみ・佐久間 敦子

Consideration on Reading Picture-Books to Infant in a group

Using Observation record

Megumi SAITO / Atsuko SAKUMA

キーワード：絵本、読み語り、集団、保育者養成、言葉

1 序 論

幼稚園、保育所、こども園では、ほぼ毎日絵本の読み語りを行っている。幼児教育における絵本の位置付けについて「幼稚園教育要領」では、領域「言葉」のねらいのひとつとして、“日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる”。と示されている。子どもたちは絵本を通して周囲の人と心を通わせる体験を重ねることが大切であるということである。

集団による読み語りについては、これまでも研究されてきた。横山（2008）は、絵本の読み語り場面の観察と保育者へのインタビューから、保育現場の集団における絵本の読みが語りは、保育者と子どもたちの安定した信頼関係の上に積み重ねられる共有体験であること、絵本と子どもの生活の連続性が可能となることをその意義として示唆している。高橋（2005）は、集団における絵本の読み語りにより、子どもたちは色々な感じ方を知る。友だちと共感し、共通のイメージをもつことで次の遊びや生活を豊かなものとしていき、この体験が知識や考え方を広げ他と“共感する”ということにつながると述べている。

會澤ら（2019）は、集団での絵本の読み聞かせに関する実践的な研究を概観し、年齢による絵本の読み聞かせ場面における幼児の言動は変化することを明らかにした。しかし、日常の保育における縦断的な時間軸を通して幼児の変化を詳細に捉えることが課題であると述べている。

これらを鑑み、本研究は縦断的な時間軸による幼児の絵本に対する言動を知り、集団を対象とした読み語りの意義について考察することを目的とする。具体的には3歳児の集団、比較対象として3歳の女児1名を対象として、時期を変えて同じ絵本の読み語りを1年に2度行い、その時の観察記録から考察することとする。

なお、本稿では、生田（2008）と村中（2005）を参考として、一般に用いられる「読み聞かせ」ではなく、集団を対象としたものは「読み語り」（生田2008）、1対1の場合は「読みあい」（村中2005）を用いる。生田は聞き手に取って多少押し付け感をいなめない「読み聞かせ」ではなく、「読み語り」という言葉で表現することにより聞き手の自由な心情を大切にし、自らのテーマをもって絵本を「語る」読み手の姿勢を明確にする、と述べている。また、村中は絵本を1対1で読むことを「読みあい」と表し、多くの実践を重ねてきた。絵本は、どちらか一方からもう一方への読み聞かせる行為よりも互いにものごと世界不思議に立ち会う対等な関係づくりであると述べている。

2 方 法

実験 1

実験対象：

千葉県内にあるこども園の3歳児26名（男児16名、女児10名）と24名（男児14名、女児10名）の2クラスの幼児を対象とした。

実験時期：

2019年6月と12月であった。

記録：

各クラスの担任教諭が絵本「おばけのてんぷら」（せなけいこ作）の読み語りをを行った。子どもたちにとって「おばけのてんぷら」は第一回目の読み語り時にはじめて触れた絵本であった。「おばけのてんぷら」を選書した理由は3歳児対象の大型絵本のうち、まだ読んだことがない、という理由であった。子どもたちをビデオ撮影し、発話や様子を記録した。

分析：

佐藤ら（2007）の研究の分析方法を参考にして、記録から文字化し、2クラスの発話と子どもたちの様子を表にまとめた。

実験 2

実験対象：

千葉県内の3歳児1名（女児）N児を対象とした。

実験時期：

2019年12月であった。

記録：

N児の祖母がN児と絵本「おばけのてんぷら」（せなけいこ作）の読み合わせを行った。その間、N児をビデオ撮影し発話や様子を記録した。

分析：

実験1と同様に記録から文字化し、発話と様子を表にまとめた。

倫理的配慮：

実験1の対象であるこども園の園児については、ビデオ撮影は文字起こしのために使用することを説明し個人が特定しない旨を説明し了承を得た。実験2の対象であるN児については、共同研究者がN児の母親に書面をもって実験の趣旨を伝え、実験対象となることの同意を同意書への署名をもって得た。

3 結 果

実験 1

6月と12月の発話、様子を対比させてクラス別に表に示した（表1、表2）。

1）全体的な子どもの発話の状況

どちらのクラスも6月は1人から2、3人の発話が多かったが、12月には全体に発話が広がっていく場面がみられた。6月は、発話が絵本の言葉の繰り返しの独り言やつぶやき、保育者に向けての発話であると思われる言葉が多く、周囲の子どもが1人の子どもが発した言葉を繰り返すということは少なかった。しかし、保育者が読んだ絵本の言葉を繰り返すという姿がみられた。1人の発話に対して同じ発話を他の子どもが繰り返す、という場面は、クラスAは、6月には9か所、12月では15か所、クラスBは、

6月は5か所、12月で16か所であった。いずれも6月より12月の方が同じ発話を異なる子どもが繰り返す場面が多かった。発話の内容はクラスにより異なっていた。

2) クラスA、クラスB共通して繰り返しがみられた場面（下線部分参照）

(1) 「おばけのてんぷら」という保育者のタイトル発話時

6月に「おばけのてんぷら」というタイトルを保育者が子どもたちに伝えた時、クラスAでは“おばけ”に反応して“おばけ、おばけ”という発話であったが、クラスBでは“こわい、こわい”という発話になっていた。“こわい”、は、“おばけがこわい”であることは間違いなく、いずれのクラスとも“てんぷら”に対する反応ではなく、“おばけ”に対する反応、という点で共通していた。また、どちらのクラスでも、“おばけ”、と“こわい”が交ざった発話にはなっていない、どちらか一方の発話が数人の子どもたちによって繰り返された。

12月にもタイトルの発話の後は子どもたちの反応が大きく、クラスAでは“おばけ”“みた”とおばけに対する発話と以前見たか見なかったかを子どもたちで言い合う姿が見られた。クラスBでは、おばけに対する反応がなく、てんぷらについての発話があった。両クラスとも、“おばけのてんぷら”というタイトルに対する反応だけではなく、この絵本に対する共通の経験である“この絵本を過去に見た”、“見なかった”、ということが話題になっている姿がみられた。

(2) P19 おばけの登場場面

クラスAにおいてもクラスBにおいてもP19でおばけが登場する場面において、“おばけ”という発話が共通してみられた。クラスAでは6月も12月も“おばけ”の発話は1人のみで、12月には“てんぷら”についての発話がみられた。一方、クラスBでは6月も12月も“おばけがこわい”という発話がみられた。両クラスとも12月の方が繰り返す発話は多かった。

(3) P23 おばけがてんぷらを食べようとする場面

クラスAもクラスBも、おばけがてんぷらを食べようとする場面において、(てんぷらを食べては)“だめ”という発話がみられた。クラスAの12月では、ひとり“いいよ”という発話もみられたが、ほぼ全員で“だめ、だめ、だめ”と発話する様子が見られた。

(4) P32 おばけもてんぷらにすることを全然知らなかったという最終頁

クラスAでは、6月には1人が“はい”という発話がみられたが、繰り返して他の子どもたちが発話することはみられなかった。12月には、全員で笑う姿がみられた。一方、クラスBは、6月に“こわかった”と“おもしろかった”という発話がみられ、12月には“おしまい”をほぼ全員で発話していた。

表1 クラスAの読み語り時の発話

絵 本	子どもの発話と(様子) 6月	子どもの発話と(様子) 12月
おばけのてんぷら	<u>おっきい</u> <u>おばけ</u> <u>おばけ</u> <u>おっきい</u> <u>おきい</u> (集中して絵を見ている)	あ <u>おばけ～</u> <u>おばけ～</u> <u>こないだみたやつ</u> <u>これ、みた～</u> <u>みてない</u> <u>みたよ～</u> <u>みてない</u> おなじじゃん <u>みてない</u>
P2 うさこはたべることがだいすきです 「きょうはやまへくさついにいこう。サラダにしようかん。それともおみおつけがいいかな…。」	なんで サラダ	(子ども同士で言い合う) (集中して絵を見ている)
P4 「あれ、こねこくん なにたべてるの？ おいしそうね。」	ねこがなんか食べてる	なにたべてるの

「いやだ！のぞきこんじゃあ。おべんとうのおかずはてんぷらだよ。」	やよ～ おべんとうになに	
P6 「ちょっとおあじみさせてよ。まあ おいしい。」	勝手に食べちゃためだよ	あつみて
p7 「おいものてんぷらならたべてもいいけど、おさかなのてんぷら とっちゃいやだよ。」		<u>え？え？え？</u>
P9 「あー、おいしかった。この つくりかた おしえてよ。」 そこでこねこは うちへかえってかあさんねこのおりょうりのほんをかりてきました。	おばけなんかいない やだやだやだ え～ 何食べてる	<u>おっきい</u> <u>おっきい</u>
P10 「さあ、いっぱい てんぷらをつくろう。にんじんにおいも、さやえんどうに かぼちゃ それから、たまねぎ…。こむぎこも あぶらも たまごも かった。おこづかい みんな つかっちゃったけど まあ いいや。」	え～、そんなにかうの こんな (指しながら) 12345	たまごも
P12 えーと、まずやさいをきって ころもは、たまごとこなとつめたいみずをさっとかきまぜる		
P13 やさいに ころもをさっとつけて あついあぶらのなかで、じゃーっとあげる。とちゅうでうらがえし。 あっ、たまねぎ きるの わすれたわきって、おきましよう。」	きって	
P14 「あーあ、たまねぎきると、めにしみてなみだがとまんないなあ。めがねをはずしてなみだをふかなくちゃー。」	こしょうがめがねのところにはいってる (保育者に話す)	(指さす)
P15 さあ、あついあぶらでどんどんあげましよう ところが、うっかりまちがえてめがねをてんぷらのころものなかにぼちゃん！		<u>あつめがねはいっちゃう</u> <u>はいっちゃうよ</u> <u>はいってる</u>
P17 「ああ おいしい。てんぷらってだーいすき。てんぷらはあげたてにかぎるわ。」		
P19 てんぷらをあげるいいにおいは、ずーとながれてやまのおばけのところまでにおってきました。 「おやっ、なんだろう？おいしそうないおい！」	<u>おばけだ おばけ</u> くつはいちゃだめだよ（隣の子に話す）	<u>おばけこわ～い</u> <u>おばけこわ～い</u> <u>おばけこわ～い</u> <u>きゃ～（大勢で）</u> (手をあげながら) <u>でもおばけてんぷらたべちゃう</u> <u>てんぷら てんぷら</u>
P20 「ははあ、このうちだな。なんのごちそうだろう？あっ、てんぷらだ！」	<u>おばけだ おばけだ</u>	
P22 「そうだ！ このかぎあなから はいって やろう。」 「ちいさくなーれ、べろべろばあー。」	こわいよ、どうやってあけるの (保育者に) はいってる おばけ おばけ（数人が続けて言う）	<u>えへへ（笑う）</u> <u>だめ だめ</u> <u>だめ だめ（皆で）</u> <u>だめ だめ いいよ</u> <u>いいよ いいよ</u> <u>だめだめだめ</u>
P23 「それー」 「わあ、なんておいしそう！さっそくたべちゃおう！」	<u>だめ とっちゃ、だめよ</u> <u>だめ だめ</u> <u>だめ（数人が繰り返す）</u> <u>とっちゃった</u>	
—		

<p>P25 おばけは うさこに みつからないよう ちょろちょろとびま わって てんぶらのつまみぐい。 「あー、おいしい おいしい！」 そんなこととは、 ちっとも しらない うさこは、 「あー おいしい。でも てんぶらって ずいぶん なくなるのが はやいなあ！」</p> <p>P26 ところが そのうち、 おばけは あぶらで すべてころもの なかに ぼちゃーん！ 「おや、なんだろう！ びょんびょん はねてるわ。 いやに いきの いい やさいね。まあ、いいや これも あげましょう。」 おばけはあわてて、 「てんぶらに しちゃあ いやだ！」 と いおうとしましたが、くちのなかは ころもで いっぱいでこえが でませ ん。</p> <p>P28 うさこは びょんびょん はねているも のをあぶらの なかへ ほうりこみまし た。 あっ かわいそう！おばけの てんぶら！ いいえ おばけは むちゅうで するり ととびだしました。だから あげたのは ころもだけ。</p> <p>P29 あれっ このてんぶら からっぽだわ。へんなの！</p> <p>P30 「さあ、この おおきいので さいごだわ。」</p> <p>P31 「あれっ」 がりん</p> <p>P32 「あっ、めがねだ！ めがねの てんぶら つくっちゃった。 わあ、おかしい！」 でも うさこは おばけも てんぶらに する ところだったなんて ぜんぜん しりませんでした。</p> <p>おばけのてんぶら おしまい</p>	<p>とっちゃ だめよ、 だめ、 だめ（繰り返す）</p> <p>こえ？</p> <p>こえが出なくなったお こえがでなくなったの こえがでなくなったの</p> <p>あっは</p> <p>だめだね だめだよ</p> <p>はや〜い はや〜い はや〜い</p> <p>同調：9か所</p>	<p>2しかないね あと2こあと3こ3こだよ 2こだよ 3こだよ</p> <p>おばけ おばけ</p> <p>いいよ いいよ いいよ やだ〜</p> <p>え？ え？ え？</p> <p>あれ？ あれ？ あれ？</p> <p>めがねだ めがねだ あはは （一緒に笑う） 笑う</p> <p>はやい</p> <p>ちょっとだけこわかった おばけ 間違えて怖かった おばけ おばけのてんぶら間違えてやだった</p> <p>同調：15か所</p>
---	--	--

表2 クラスBの読み語り時の発話

絵 本	子どもの発話と(様子) 6月	子どもの発話と(様子) 12月
いつもよりおおきい絵本だよ	(マットの上に座る)	マットの上に座る
おばけのてんぷら	<u>こわ〜い</u> <u>こわ〜い</u> <u>こわくないよ</u> <u>こわい こわい</u> (絵本を向いて絵本に見入っている)	<u>やった〜、</u> <u>やった〜</u> <u>てんぷらたべたい</u> <u>てんぷらたべたい</u>
P2 うさこはたべることがだいすきです 「きょうはやまへくさつみにいこう。サ ラダにしようかな。それともおみおつけ がいいかな…。」		<u>でっかい</u> <u>でっかい</u> (絵本を向いて絵本に見入っている)
P4 「あれ、こねこくん なにたべてるの？ おいしそうね。」 「いやだ！のぞきこんじゃあ。おべん とうのおかずはてんぷらだよ。」		
P6 「ちょっとおあじみさせてよ。まあ お いしい」		でっかい
p7 「おいものてんぷらならたべてもいいけ ど、おさかなのてんぷら とっちゃいや だよ。」		
P9 「あー、おいしかった。この つくりか た おしえてよ。」 そこでこねこは うちへかえってかあさ んねこのおりょうりのほんをかりてきま した。		
P10 「さあ、いっぱい てんぷらをつくろう。 にんじんにおいも、さやえんどうに か ぼちゃ それから、たまねぎ…。こむぎ こも あぶらも たまごも かった。お こづかい みんな つかっちゃったけど まあ いいや。」	おっこっちゃうよ	<u>じゃがいも</u> <u>だいこんだ</u> <u>あと、やきいも</u> <u>やきいも</u> <u>やきいも</u> <u>まあ、いいか</u> <u>まあ、いいか</u>
P12 えーと、まずやさいをきって ころもは、たまごとこなとつめたいみず をさっとかきまぜる	なんでやさいきるのよ なんで コロツケみたい	おめでとう
P13 やさいに ころもをさっとつけて あついあぶらのなかで、じゃーっとあげ る。 とちゅうでうらがえし。 あっ、たまねぎ きるの わすれたわ きって、おきましょう。」	たまねぎ	きっておきましょう 目、しみるよ <u>いたそうだな</u> <u>いたそうだね</u> あってんぷらにしちゃう
P14 「あーあ、たまねぎきると、めにしみて なみだがとまんないなあ。めがねをはず してなみだをふかなくちゃー。」		
P15 さあ、あついあぶらでどんどんあげまし ょう ところが、うっかりまちがえてめがねを てんぷらのころものなかにぽちゃん！	<u>おばけだ</u> <u>おばけだ</u> あ〜、いれちゃった	<u>え〜</u> <u>えへへ</u> <u>あはは</u> <u>あはは (笑いがおこる)</u>
P17 「ああ おいしい。てんぷらってだーい		<u>てんぷら</u>

<p>すき。てんぷらはあげたてにかぎるわ。」</p> <p>P19</p> <p>てんぷらをあげるいいにおいは、ずーっとながれてやまのおばけのところまでにおってきました。</p> <p>「おやっ、なんだろう？おいしそうなおい！」</p> <p>P20</p> <p>「ははあ、このうちだな。なんのごちそうだろう？あっ、てんぷらだ！」</p> <p>P22</p> <p>「そうだ！ このかぎあなから はいって やろう。」</p> <p>「ちいさくなーれ、べろべろばあー。」</p> <p>P23</p> <p>「それっー」</p> <p>「わあ、なんておいしそう！さっそくたべちゃおう！」</p> <p>P25</p> <p>おばけは うさこにみつからないよう ちょろちょろとびまわって てんぷらのつまみぐい。</p> <p>「あー、おいしい おいしい！」</p> <p>そんなこととは、ちっとも しらない うさこは、</p> <p>「あー おいしい。でもてんぷらって ずいぶんなくなるのが はやいなあ！」</p> <p>P26</p> <p>ところが そのうち、おばけは あぶらで すべってころもの なかに ぼちゃーん！</p> <p>「おや、なんだろう！ぴょんぴょん はねてるわ。いやに いきの いいやさいね。まあ、いいやこれも あげましょう。」</p> <p>おばけはあわてて、</p> <p>「てんぷらに しちゃあ いやだ！」</p> <p>と いおうとしましたが、くちのなかは ころもで いっぱいでこえが でません。</p> <p>P28</p> <p>うさこは ぴょんぴょん はねているものをあぶらの なかへ ほうりこみました。あっ かわいそう！おばけの てんぷら！いいえ おばけは むちゅうで するりととびだしました。だから あげたのはころもだけ。</p> <p>P29</p> <p>あれっ このてんぷらからっぽだわ。へんなの！</p> <p>P30</p> <p>「さあ、このおおきいのでさいごだわ。」</p>	<p>おばけきたよ</p> <p>てんぷらおばけきらい てんぷらすき てんぷらだいすき てんぷらすき わたし、てんぷらすき</p> <p>おこられる</p> <p>あー つけたね</p> <p>へんなのだって</p>	<p><u>てんぷらたべたい</u> <u>てんぷらたべたかった</u></p> <p>おばけ てんぷらてんぷら (身体を動かしながら) てんぷらてんぷら (一人で)</p> <p>はいっちゃん</p> <p><u>かわいい</u> <u>かわいい</u> <u>かわいい</u> あかちゃんだ たべちゃだめ たべちゃだめ いいよ <u>でもおばけ、てんぷらにしちゃうからいいでしょ</u></p> <p><u>はいっちゃん</u> <u>はいりました</u> あれ？</p> <p><u>だめ～ だめ～</u> <u>だめ～ だめ～</u> <u>だめ～</u></p> <p><u>え～</u> <u>え～</u> <u>え～</u></p> <p><u>へんなの へんなの</u> <u>へんなの へんなの</u> <u>へんなの へんなの</u> (次々に)</p>
--	--	---

P31 「あれっ」 がりん		<u>かりん、かりん、かりん</u> <u>かりん、かりん</u>
P32 「あっ、めがねだ！ めがねの てんぷら つくっちゃった。 わあ、おかしい！」 でも うさこは おばけも てんぷらに する ところだったなんてぜんぜん しりませんでした。	あは あは <u>おもしろいね</u> <u>おもしろいね</u> <u>こわかったね</u> <u>こわかった</u> <u>こわかったね</u> <u>こわかった</u> 同調：5か所	めがね～ <u>おかしい</u> <u>おかしい</u> だってさ～、 ままのてんぷらみたい ままのてんぷら <u>おかしい</u> <u>おしまい</u> <u>おしまい</u> <u>おしまい</u> <u>おしまい</u> <u>おしまい</u> 同調：16か所
きょうのおはなしは おばけのてんぷらでした		

実験2

実験2の結果を表3. に示した。

N児は1歳の頃から、夜寝る前の母親からの読みあいで様々な絵本を経験しており、「おばけのてんぷら」はお気に入りの本とは言えないが、内容は既知の話である。この日は特に本を読んでほしいというわけではなく、読み手が「絵本を読もう」と誘って読み始めた。

N児はアンパンマンごっこが好きで、登場する人形たちを動かして劇のような「なりきりストーリー」を展開して遊んだ後だった。カレーパンマンの人形を手にしていたため、N児とカレーパンマンの両方の反応をしながら絵本を見、話を聞くという形であった。

読み手は、対話的な反応をせず、読むことを重視し、絵本に関心を向けるような言葉がけはなく、N児は一貫してカレーパンマンから意識が離れることはなかったが、所々で、本の内容に関わる発話や、反応が見られた。(発話と子どもの様子の記述の下線部) 集団で多くの子どもが発話した“こわい”という発話はなかった。

集団の発話と同様に、絵本のことばを繰り返す姿が2ヶ所でみられた。P15のめがねがなべに落ちるときの“ぼちゃん”という発話、最後になべの中でめがねにあたった音“がりん”である。その他の発話は読み手を意識したものであった。手にしていたカレーパンマンを絵本に近づけようとする、というカレーパンマンと絵本の世界を共有しようとしているかのような行動が見られた。

表3 N児の読みあい時の発話の様子

絵 本	子どもの発話	子ども、大人の様子
おばけのてんぷら	<u>「おばけのてんぷら」</u>	タイトルは読み手の後に繰り返す。 手に収まるほどの小さなカレーパンマンのぬいぐるみをテーブルの上のせて、座らせたりしながら絵本を見ている。
P2 うさこはたべることがだいすきです 「きょうはやまへくさつみにいこう。サ ラダにしようかん。それともおみおつけ がいいかな…。」	「カレーパンマンがねえ、前に行きそう になってる」 「タッタ、タッタ、タッタタタ」	本には集中するがぬいぐるみを本に近づ けようとする

<p>P4 「あれ、こねこくん なにたべてるの？ おいしそうね。」 「いやだ！のぞきこんじゃあ。おべんとうのおかずはてんぷらだよ。」</p> <p>P6 「ちょっとおあじみさせてよ。まあ おいしい」</p> <p>p7 「おいしいものてんぷらならたべてもいいけど、おさかなのてんぷら とっちゃいやだよ。」</p> <p>P9 「あー、おいしかった。この つくりかた おしえてよ。」 そこでこねこは うちへかえってかあさんねこのおりのりのほんをかりてきました。</p> <p>P10 「さあ、いっぱい てんぷらをつくろう。にんじんにおいも、さやえんどうに かぼちゃ それから、たまねぎ…。こむぎこも あぶらも たまごも かった。おこづかい みんな つかっちゃったけど まあ いいや。」</p> <p>P12 えーと、まずやさいをきって ころもは、たまごどこなとつめたいみずをさっとかきまぜる</p> <p>P13 やさいに ころもをさっとつけて あついあぶらのなかで、じゃーっとあげる。 とちゅうでうらがえし。 あっ、たまねぎ きるの わすれたわきって、おきましよう。」</p> <p>P14 「あーあ、たまねぎきると、めにしみてなみだがとまんないなあ。めがねをはずしてなみだをふかなくちゃー。」</p> <p>P15 さあ、あついあぶらでどんどんあげましよう ところが、うっかりまちがえてめがねをてんぷらのころものなかにぼちゃん！</p> <p>P17 「ああ おいしい。てんぷらってだーいすき。てんぷらはあげたてにかぎるわ。」</p> <p>P19 てんぷらをあげるいいにおいは、ずーっとながれてやまのおばけのところまでにおってきました。 「おやっ、なんだろう？おいしそうなにおい！」</p>	<p>「行って食べたいよう」 「『いいよ』って言って」</p> <p>「カレーパンマンが、タッタタッタ、タッタタッタって」</p> <p>「『とって、とって、とって、とって』って、見ちゃうの、近くで」</p> <p>「近くで見てる」 「おばあちゃんが、『ちょっと』って言って」</p> <p>「いいー」（ぬいぐるみをまた前に出す）</p> <p>「や・お・や」</p> <p>「見てる、近くで」</p> <p>「近くで見てる」</p> <p>「ぼちゃん」</p> <p>「タッタタッタ」 「タッタ、タッタ、タッタッタ」 「見てるカレーパンマン」 「カレーパンマンが見てる」</p>	<p>「たべてるの？」のあたりは嬉しそうに絵を見る。（N児は食べることが好き）</p> <p>「てんぷらだよ」の後、手にしたカレーパンマンのセリフとして発語 本をめくると、発語と同時にぬいぐるみを本の前に動かす</p> <p>本は見えていて、ストーリーは追っている</p> <p>猫が料理の本を頭上に持ってくる絵にぬいぐるみを寄せて</p> <p>（ページをめくる）</p> <p>読み手の腕をひいて、注意するよう促すそぶりをする。 「Nちゃんと一緒に下がって見てて、おめめ悪くするからね」ぬいぐるみをN児のところに戻す</p> <p>絵本の中の文字を見つけて大きな声で読む ぬいぐるみをまた本の近くに寄せて P12と13の左右に目を動かしている。</p> <p>少し注意をそらし、ぬいぐるみを動かして遊ぶ。 「じゃーっ」の辺りからまた、絵本を注視する。</p> <p>カレーパンマンが近くによるのを注意するのを求める様子</p> <p>落ちた様子に対してなのか、文字をみてなのか先回りして、「ぼちゃん」と言い、絵に指をつける</p> <p>ぬいぐるみを近づける</p> <p>読み手の顔をうかがいいたずらな目つきで言う</p> <p>本を見ながらニヤツとする。</p>
---	--	---

<p>P20 「ははあ、このうちだな。なんのごちそうだろう？あっ、てんぷらだ！」</p> <p>P22 「そうだ！ このかぎあなから はいって やろう。」 「ちいさくなーれ、べろべろばあー。」</p> <p>P23 「それっー」 「わあ、なんておいしそう！ さっそく たべちゃおう！」</p> <p>P25 おばけは うさこに みつからないよう ちょろちょろとびまわって てんぷらのつまみぐい。 「あー、おいしい おいしい！」 そんなこととは、ちっとも しらない うさこは、 「あー おいしい。でも てんぷらって ずいぶん なくなるのが はやいなあ！」</p> <p>P26 ところが そのうち、おばけは あぶらで すべっておろもの なかに ぼちゃーん！ 「おや、なんだろう！ ぴょんぴょん はねてるわ。いやに いきの いいやさいね。まあ、いいやこれも あげましょう。」 おばけはあわてて、 「てんぷらに しちゃあ いやだ！」 と いおうとしましたが、くちのなかは ころもで いっぱいで こえが できません。</p> <p>P28 うさこは ぴょんぴょん はねているものをあぶらの なかへ ほうりこみました。</p> <p>あっ かわいそう！おばけの てんぷら！いいえ おばけは むちゅうで するりととびだしました。だから あげたのはころもだけ。</p> <p>P29 あれっ このてんぷらからっぽだわ。へんなの！</p> <p>P30 「さあ、このおおきいので さいごだわ。」</p> <p>P31 「あれっ」 がりん</p> <p>P32 「あっ、めがねだ！</p>	<p>「タッタタッタ」</p> <p>「こっちで、近くで見てる」 「『だめよ』って言ってる」 「駄目だよって」</p> <p>「ここで見てる」 「ここで近くで見てる」</p> <p>「がりん」</p>	<p><u>どうするのかなとか、少しワクワクしているような表情</u></p> <p>ぬいぐるみを本に近づける ぬいぐるみは本に近づけた後は動かさず、本を見る形で持つ</p> <p>注意してもらいたくて読み手にアピールする。読み手は本を読むことばかり。少し退屈してきたのか、要求が通らないのでつまらないのか、下を向く</p> <p>また、ぬいぐるみを本に近づける</p> <p>ぬいぐるみを本につけたまま、</p> <p>興味を取り戻したのか、ページをめくろうとする 絵を覗き込むように体を傾けて、この後の展開を期待しているかのように体をまた反対に動かす。 先回りして「がりん」と嬉しそうに大きな声で言う</p>
---	--	--

めがねの てんぷら つくっちゃった。 わあ、おかしい！」 でも うさこは おばけも てんぷらに する ところだったなんて ぜんぜん しりませんでした。	「タッタタッタ」 「ガリッ」 「これ見て、タッタタッタ」	嬉しそうな表情 メガネのところは 父親も読み手もメガネをかけているから か、楽しそうに反応する。 ぬいぐるみを本の中にくっつけて自分も 身を乗り出す。 最後までカレーパンマンを離さず、カレー パンマンにいたずらをさせる。
おしまい		

4 考 察

本研究は、本研究は縦断的な時間軸による幼児の絵本に対する言動を知り、集団を対象とした読み語りの意義について考察することを目的とした。

まず、3歳児の集団を対象とした6月（入園後2か月目）の読み語り時の発話は、絵本に出てくる言葉を拾って発する言葉が多いことがわかった。読み手である保育者に対する発話でもあると考えられる。これは、対象として観察した1人に対する読みあい時と共通している。つまり、6月の時点では周りに友だちがいるが友だちと共有しての発話が少なく、自分と絵本、自分と読み手の保育者との関係を主として絵本の読み語りが行われていると考えられる。3歳児の発達段階から考えても、友だちとの関係より、大人との1対1の関係が主であるが絵本の読み語りでもその関係性が主であることが明らかになった。

12月になると、1人の発話に対して何人かが同じ言葉を発している場面が増えた。少しずつ周りの友だちを意識し始めてきたことの表れであるといえる。そして、このことは「共感」に向かう「同調」の始まりではないかと考えられる。

近年のヒトを対象とした研究では他者との関係形成を支える認知基盤として同調行動が注目されている（ユラ，2012）。ヒトは意識しなくても他者の身振りやリズムが「伝染」することが明らかになっており、そうした個体間の同調が相手に対する親和性を高めることが示唆されている（ユラ，2012）。同じ絵本を一緒に見る集団における「絵本の読み語り」という経験を通して他者の言葉が伝染し、そのことで集団の親和性が高まっていくのではないかと考えられる。6月と比較して12月の方が他者の言葉を繰り返す場面が多かった点については、あくびの伝染が5歳未満の子どもでは見られない、人間以外の動物ではみられない（松沢，2004）、ということから社会性が発達することと関連があるとも考えられる。松沢はまた、あくびの伝染はある種の「共感」する能力というものを前提としていると考えられる、と述べている。磯村ら（2019）は、継続して一緒に遊ぶことで他児の気持ちを理解し、他児の目的を理解するようになる。また、そのことを通して他児と気持ちを共有し目的を共有することにより仲間関係が深まる、と示唆している。

以上より、集団における絵本の「読み語り」は、同じ経験を友だちとすることにより、他者の言葉が伝染する同調が起これ、それが親和性を高めることにつながる、また発達に伴い同調が多くなりさらに親和性が高まる可能性がある。「同調」は「共感」を前提にしているということから考えると、集団における絵本の「読み語り」は、他者の気持ちを理解する「共感」へとつながっていく活動であるともいえる。「同調」から「共感」へという流れは、1対1の「読みあい」と「読み語り」と異なる点である。

最後に、絵本とは何か？ を再考するにあたり、哲学と絵本との関わりを研究している玉置（2018）の論文から引用する。“おとうさんが脚を組んで床に座り、そこにわが子を入れて、一緒に絵本を読んであげてみてはどうだろう。ぴったりとくっついて触れ合っているのは、子どもの背中とおとうさんの胸、子どものお尻とおとうさんの脚かもしれない。そして、どちらがどちらに触れていると言うことはでき

ない。触れるということはそういうことなのだ。子どももおとうさんも、全身が触れ合っていると、感じているだろう。おとうさんが絵本を読み始めると、子どもはお話が面白いからか、絵が面白いからか、おとうさんのあごのひげがちくちくするからか、くっくっくっとならうと笑いだす。幼い子どもの柔らかく弾力性のあるからだの振動がおとうさんに伝わる。おとうさんはますます興に乗って、子どもを喜ばせようと声を工夫して読む。もちろん、おとうさんが文字の読み手ではあるが、おとうさんは聴衆である子どものからだの暖かさ、揺れ、自分の読み方がわが子に与えている影響を感じながら読む。これはまさしく、メルロ＝ポンティの言う、「対話」であり、「共同作業」である。そして、二人で「一枚の織物を織り上げている」のだ。さらにこうも言える。「われわれは同じ一つの世界をとおして共存しているのである。」この子どもは、おとうさんと読んだ絵本と、おとうさんの声、おとうさんの身振りを忘れることはないだろう。記憶では思い出せなくても、からだは忘れることはない。実験2. においてN児が、読み手に注意を引くための行動や父親のめがねと関連付けてめがねに反応している姿が見られたが、それはまさにこのことである。N児は、既に好みの絵本があり、本研究の対象となった絵本はそうでもないようであった。1対1の読み合いでは、好みの絵本をじっくりと読むということは大事なコミュニケーションとなる。

絵本は、単なる本ではなく、コミュニケーションツールであるといわれるが、この正置の論文からも人と人との間で行われるコミュニケーションであるべきであることが理解できる。従って、読み手がデジタル機器であること、子どもが1人で読むのではなく、読む大人がいて、五感で子どもは何かを感じる。そして集団であれば一緒に見ている友だちと同じ経験を共有し、そのことがやがて共感につながる活動であると考えられる。絵本の読み語りにおいて、一つの言葉を誰かが発すると同じ言葉を言い合うことこそ共感への第一歩である。

まずは1対1での読みあいにおいて、読み手である大人との十分なコミュニケーションを育む。そして集団でのコミュニケーションが可能な絵本の読み語りは、単なる絵本を読むという活動で留まらず人を育てていくものであるといっても過言ではない。今後も絵本を通してどのようなコミュニケーションが存在し、それがどのように共感へとつながっていくのか、そのために保育者はどのように準備をする必要があるのか、発達に沿った絵本の選書、絵本の取り扱い方など、研究者のみならず実践者も研究を深めていく必要がある。

本研究は、3歳児における集団における絵本の読み語りについて検討した。引き続き、同じ集団を対象として縦断的な研究を行い、絵本の読み語りと集団の育ちについて検討をしていくことが望まれる。

[謝辞] 本研究は、千葉敬愛短期大学「プロジェクト研究」の助成を受け、「総合子ども学研究所」における附属幼稚園との共同研究の一環として行ったものです。「読み語り」にご協力いただきました千葉敬愛附属幼稚園の先生方と子どもたち、および「読みあい」に協力していただきましたNちゃんに記して感謝申し上げます。

■引用文献・参考文献

- ・ 會澤のはら、片山美香、高橋敏之（2019）幼児を対象とした集団における絵本の読み聞かせに関する研究動向 岡山大学教師教育開発センター紀要（9）215-228
- ・ 生田美秋監修 2008 365日まいにち絵本 平凡社 生田美秋・石田光恵・藤本朝巳編著 2013 ベーシック絵本入門 ミネルヴァ書房
- ・ 磯友輝子・坪井寿子・藤後悦子・坂元昂「第3節 絵本の読み聞かせとこどもの視線」
- ・ 磯村正樹、鈴木裕子（2019）幼児期における対人理解と仲間関係の関連：5歳児における「他児の喜びを自らの喜びと感じる」姿に焦点を当てて 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要（4）, 41-49
- ・ 佐藤公治、西山希（2007）絵本の集団読み聞かせにおける楽しさの共有過程の微視発生的分析 北海道大学大学院教育学研究科紀要（100）、29-49

- ・松陰大学（2019）平成29年度 文部科学省委託 幼児期の教育内容等深化・充実調査研究 報告書
- ・せなけいこ「おばけのてんぷら」ポプラ社 1976
- ・高橋順子、首藤敏元（2005）幼児教育における集団での絵本の読み聞かせ 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要（4）,165-176
- ・東京未来大学 科学研究費補助金研究成果報告 論文集 第3章 未来型のこどもの対人認知・コミュニケーション能力と促進法 www.tokyoumirai.ac.jp/research_report/.../index.html 2020年1月5日閲覧（2011）
- ・正置友子（2016）メルロ・ポンティと子どもの現象学：『知覚の現象学』における人生の最初の数年間 臨床哲学 18 101-119
- ・松沢哲郎（2004）あくびの伝染 連載ちびっこチンパンジー 第34回 岩波書店「科学」74（10）
- ・村中季衣（2005）絵本の読みあいからみえてくるもの ぶどう社
- ・横山真貴子、水野千具沙（2008）教育実践総合センター研究紀要 17, 41-51
- ・奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- ・ユリラ、服部裕子、友永雅己（2012）「チンパンジーにおける社会的・物理的刺激に対する同調行動」動物心理学研究 62, 130-131